

初期法然伝の研究史

善 裕昭

浄土宗を開き専修念仏を説いた法然の伝記は数多い。早い頃の『知恩講私記』『法然上人伝法絵』にはじまり鎌倉後期の『拾遺古徳伝絵』『法然上人行状絵図』に至るまで、多くの種類と類本が作られ偉業や奇瑞がたたえられた。伝記研究の分野では、これらをもとに法然の生涯の歴史的理解がなされ、また伝記作者や成立時期、他伝との先後関係、諸本間の相違などの問題が論じられ、諸伝記の性格や位置づけが明らかにされてきた（各伝記の概要は善、二〇二一～二〇二五）。

私に与えられた課題は「法然伝の研究史」であるが、一つの伝記だけでも直接・間接に触れた多くの論考があり、論じるべき問題や課題も多岐にわたる。すべての伝記を取り上げるのは難しいので、今回は初期成立の『知恩講私記』、『法然上人伝法絵』、醍醐本『法然上人伝記』に限りたい。また『源空聖人私日記』にも少し触れる。これらは法然の生前の姿を知る者によって作られた重要なもので、後継伝記に及ぼした影響も大きい。作者および成立時期や成立過程の問題、諸本の相違等にかかわる研究を中心に取り上げ、私見を交えながら研究史を述べたい。紹介にも精粗があり、諸般の事情から取り上げなかった論考もある。この点ご了承いただきたい。

一 『知恩講私記』

『知恩講私記』（知恩講式）は法然廟堂で行われた知恩講仏事の式次第である。当時は仏菩薩や祖師の功德を讃える講式がよく作られたが、『知恩講私記』もその一種である。全体は三礼・表白・六種回向からなり、中心となる表白で法然の履歴を説くことから伝記の性格をあわせもつ。

昭和三十九年（一九六四）、大正大学榎田良洪氏が東寺宝菩提院の三密藏を調査したところ、膨大な密教聖教のなかに『秘抄口決』（房玄写）という文献があった。『秘抄口決』は不要となった古い記録の紙を半分に切斷し、その裏を利用して書かれている。ところが、紙背にある元の記録のなかに浄土教関係らしい記述があったので、『秘抄口決』をバラして切斷された断簡を整理すると、『知恩講私記』と『別時念仏講私記』の二つの文献が復元できた。翌年、榎田氏はこの二つの文献の影印・翻刻を『日本歴史』二〇〇、二〇一号に発表した（榎田、一九六五、一九六五）。さらに後にあらためて紹介している（榎田、一九七六、一九七八）。

学界の反響は大きかったようで、発表直後、鎌倉仏教研究をリードした赤松俊秀氏は、「この講式は文字どおり源空伝最古のものであることは疑いない。…もしこの講式がもつと早く発見されていたならば、故中沢見明氏に始まる源空伝研究もその様相が異なっていたに相違ない」と述べ、研究史の出発点に影響を与えたであろうほどの貴重な発見だと評した（赤松、一九六六、二七一頁）。

ただし、まったくの新出かというところではない。赤松氏も触れているが、真宗では後世まで『知恩講私記』が用いられたようで、一部の真宗寺院には室町・江戸時代の写本が伝来する。当時の真宗では本願寺を創設した覚如

の子の存覚作とみていた。『真宗聖教全書』巻五に活字で収録されていたが（底本は大阪光徳寺藏室町期写本）、法然伝として注目されることはなく、宝菩提院から古写本が発見され、はじめてその重要性が認識されたのである。

発見された『知恩講私記』に作者名はないが、法然を「先師上人」と呼ぶので直弟子作である。真宗伝来本で同箇所は「本師上人」と書き換えられている。榊田氏は次のようなことから作者を隆寛と考えた。復元できた『知恩講私記』と『別時念仏講私記』のうち後者の巻頭に「桑門劉官作」とあり、奥書にも貞応三年（二二二四）十月に隆寛が著わしたことを記す。それを元仁二年（二二二五）二月に「沙弥信阿弥陀仏」なる者が書写した。作成からわずか四カ月後だから信阿弥陀仏は隆寛と近い関係のはずである。そして作者名のない『知恩講私記』も信阿弥陀仏によって安貞二年（一一二八）に書写されていて、書体や料紙も同じである。

このような理由から榊田氏は作者を隆寛とみたが、注意しておくべきは、『知恩講私記』が隆寛の作であるという疑問はまだ解決されない」と述べたように（榊田、一九六五、二二八頁）、推定であって断定したわけではない。『別時念仏講私記』の隆寛撰は確かとしても、『知恩講私記』は断定するには決め手に欠け、なお疑念が残る。赤松氏は榊田氏の作者推定にはなぜか一言も触れない。

発見を受けていち早く本格的論考を発表した伊藤唯眞氏は、『源空聖人私日記』や醍醐本等の他伝との関連を詳しく考察して『知恩講私記』の位置づけを試みた。作者については、『選択集』引用箇所が『善導和尚十徳抄』と同じであり、山門から念仏興行の張本人とされた活躍ぶりと知恩講の興行は無関係ではないとみて、『知恩講私記』と隆寛とは親近性はあるものの、隆寛の作とは俄かに断定しがたい」と述べる（伊藤唯眞、一九九六、八頁）。

阿川文正氏は筆跡・料紙が同じという榊田説により隆寛撰と判定し、奈良興善寺の法然等消息の裏面の念仏結縁者「信阿弥陀仏」と『知恩講私記』を書写した信阿弥陀仏は同じとみる。宝菩提院本と光徳寺本との校異表を作り

他伝等との関わりを検討する（阿川、一九六六）。三田全信氏も記事内容を検討して作者について隆寛と認める（三田、一九七六、一四二頁）。

これらはいずれも榎田氏の発表後間もないもので、重要性を即座に認めた故の早い反応であった。榎田説の受けとめに差はあるものの、信阿弥陀仏がよくわからないことからすれば、断定を控えるのは無理のないところである。その後、別人作説はなく現在ではおおむね隆寛撰で通用するとは思いますが、決定的な根拠を欠き疑念はくすぶる。しかし、その後の関係史料の発見もあり、私は以下の諸点から隆寛撰とみてよいと考える。

①自力・他力の対概念を用いる

隆寛は諸著作で自力・他力の対概念をよく用いる。『知恩講私記』でも「行人、自力他力の是非に迷へり」「自力を心として空しく衆行に疲れ」「自力の心を改めて他力の願に帰す」と述べ、特徴的な思考の一斑が表れている。

②阿弥陀仏の本願を「名願」と表現

隆寛は諸著作で本願を「名願」と表現する。『知恩講私記』にも「限りて弥陀の名願に帰するは」とある。

③『選択集』を引用する

『選択集』伝授は一部の門弟に限られた中、隆寛は元久元年（一一〇四）伝授された。『知恩講私記』に『選択集』を引用するのは法然伝では最初である。また『観経疏』は「浄土宗の濫觴」、『選択集』は「他力門の指南」と述べて両書の大切さを強調しており、浄土宗教学に詳しい者の評にみえる。ただし法然没後刊行された建曆版『選択集』は、嘉祿の法難で版木が焼却されるまで流布したであろうから、他門弟でも引用可能である。

④『般舟讚』を引用する

『知恩講私記』各段末尾に善導『般舟讚』を引用する。法然没後、静遍によって『般舟讚』が発見されたのは建

保五年（一二二七）のこと（『統撰釈文義要抄』）。したがって『知恩講私記』はこれ以後の成立である。『別時念仏講私記』各段末尾にも『法事讚』『般舟讚』を引用し、『知恩講私記』と性格を同じくする。さらに他の隆寛著書で確認すると、『弥陀本願義』『滅罪劫数義』『散善義問答』等に『般舟讚』の引用はないが、建保五年以後の『極楽浄土宗義』等に引用される。

⑤ いくつかの講式を作る

曼殊院門跡に隆寛作『天台諸大師講式』が所蔵される。これも講式の一つで、天台宗で崇める龍樹・慧思・智顛・聖徳太子・最澄・法全・円仁・相応・良源らの行状をたたえる（宇高、一九九〇）。執筆年は不明だが、もと青蓮院門跡に伝来したもので、隆寛が青蓮院の仏事を勤めた頃の作だろう。

また『長西録』に隆寛著として『報恩講式』と『善導講私記』の書名をあげており、『報恩講式』は『知恩講式』の誤写とみられる（小山、一九九〇）。あるいは別称だろうか。『善導講私記』は現存しないが、このように複数の講式を作ったことから文筆の才ある講式作者としての一面が浮かび上がる。

こまかな論証は別の機会に譲るが、榎田氏の推定に以上の諸点を加え、『知恩講私記』は隆寛撰と断定できる。

作成時期は内容から明らかにされてきた。法然没後に築かれた大谷廟堂は、嘉禄の法難（嘉禄三年、一二二七）のとき破壊された。『知恩講私記』には、廟堂に参詣する人たちが絶えず、とくに年忌や月忌の賑わいは市のようにあったという。これは廟堂が存在した時の様子を伝えるはずで、成立は法難前と考えられる（伊藤唯眞、一九九六）。

『知恩講私記』は五段からなり、各段末に善導『般舟讚』が引用される。『般舟讚』は古くから日本へ伝来したが、その所在は不明のまま、先述のように建保五年静遍が見つけた。法然門弟らは一様に関心を寄せ、隆寛もさ

つそく『般舟讚』を引用した。したがって成立の上限は建保五年となる（靈山、一九九三）。以上のことから、成立期間は建保五年（一二二七）から嘉禄三年（一二二七）までの十一年間に特定できる。

さらに近年の研究をあげると、伊藤茂樹氏は後世の法然御忌の源流ともいうべき知恩講の成り立ちや、『知恩講私記』が専修正行を勧めながら顕密諸宗と協調的な姿勢を取ることを指摘（伊藤茂樹、二〇一四）。本庄良文氏は『知恩講私記』の丁寧な現代語訳を提供する（本庄、二〇一五）。坪井剛氏は法要儀式書として内容構成を検討し、知恩講が上演されたことで廟堂は単なる墳墓から聖跡へと性格を変え、法然に対する祖師信仰を促したという（坪井、二〇一一）。

『知恩講私記』の作者はこれまで疑念が残ったが隆寛と断定できる。作成時期も少し幅はあるものの、建保五年から嘉禄三年までの間に求め得る。法然没後も門弟らは著述や教化活動を盛んに行った。寺社勢力の圧力が強まるなか、隆寛は廟堂に集う念仏者たちに何を伝えようとしたのか。嘉禄の法難前の彼の言動やポジションおよび浄土宗の動向をうかがう史料として、あらためて『知恩講私記』に注目したい。『別時念仏講私記』も先行研究は少ないので今後の解明に期待したい。

二 『法然上人伝法絵』

『知恩講私記』や醍醐本『法然上人伝記』は純然たる伝記ではないが、形を整えた伝記として初めて作られたのが『法然上人伝法絵』（以下、『伝法絵』）であり初の法然絵伝である。『伝法絵流通』とも称する。上下二巻からな

り、詞書と色彩を施した絵図が交互に展開して法然の生涯を説き明かす。絵図の中に場面説明のための画中詞が書き込まれるのが大きな特徴である。

明治四十五年（一九一〇）、望月信亨氏は『本朝祖師伝記絵詞』を刊行して善導寺本を紹介し（善導寺、一九一〇）、「詞書といい絵といい、実に素朴なもので、一点の申分がない。…真に上人伝のオーソリティーといふことが出来ようと思われる。兎に角、絵伝としては、疑ひもなく最初のもので、九巻伝や勅修御伝の本となったものであることはここに断言して敢て憚らぬ所である」と述べ（望月、一九七七）、最初の法然絵伝としてその価値を高く評価した。これ以降専門家の注目するところとなり、法然伝の重要本として認められる。現存するのは次の四本である。

- ① 金沢文庫本…延応元年（一二三九）写、詞書一部の抄出、『伝法絵略記抄』
- ② 国華本 ……下巻の断簡が諸所に分蔵、鎌倉後期写、『国華』七〇五号掲載
- ③ 高田本 ……高田専修寺蔵、下巻の詞書のみ、永仁四年（一二九六）写
- ④ 善導寺本 ……久留米市善導寺蔵、『本朝祖師伝記絵詞』四巻

これらのうち全体が残るのは④善導寺本のみであり、祖本の奥書も伝えて貴重である。書名の『本朝祖師伝記絵詞』は江戸時代に名付けられたもので、巻三内題に本文と同筆で「伝法絵流通」とあり、これが本来の書名である。もと上下二巻のものが四巻に改装されていて、そのことから「四巻伝」と通称される。この通称は善導寺本のみを指す場合もあり、『伝法絵』全体の別称で使用されることもある。カラー影印本が刊行され、絵巻全体を鮮明な写真で見ることができるよう（中井、二〇〇七）。

善導寺本の序文・奥書によれば、先師法然の勤めた念仏の由来を絵図に記すことを思い立った耽空は、筑前国住人の源光忠（法名観空）の協力を得て嘉禎三年（一二三三）正月二十五日制作にとりかかり、同年十一月二十五日

に完成した。詞書は耽空が考案し、絵を観空が担当して鎌倉の八幡宮本社付近で描いたという。

制作を発願した耽空について、望月氏は嵯峨二尊院の正信房湛空とは別人とみた(望月、一九七七)。その主な理由は、耽空と異体字で表記され、嘉禎三年に湛空は六十二歳のはずが奥書で六十九歳と記されるからである。それ以来、同人が別人かの議論が長らく続いたが、どちらかといえば同人説が有力で、詳細は省くが私も同人と考える(詳細は、井川、一九六一、四四頁以下。中井、二〇一三。伊藤信二、一九九四など)。この問題は同人説で決着してよからう。

絵を描いた観空は不詳とされ、他の絵画作品も知られない。善導寺本巻二の末尾によれば湛空の同法であり、巻四末尾によると両人は相談を重ねて絵図を構想したという。二人の関係を知りうる史料として、伊藤信二氏の指摘する高野山文書「正信上人遺弟返事在連署」が注目される(伊藤信二、一九九四)。これは湛空が空海の飛行三鈷杵を高野山に返納した件に関わる文書で、他の関連文書と合わせて経緯を記すと、湛空は死期の迫った頃、貞永元年(二二三二)以来伝持した飛行三鈷杵を夢告により高野山へ返納した。亡くなった一カ月後、高野山ではそれへの報恩として仏経供養が行われ願文が読まれた。後にその願文を受け取った湛空一門は、高野山へ一門連署した礼状を送った。それがこの文書である。連署に観空も名をつらねており、確かに湛空の同法または門弟であったのがわかる。この史料は同人説も裏付ける。

善導寺本奥書によると、永仁二年(一二九四)寛恵(不詳)によって転写された。さらにそれを再転写したのが現在の善導寺本であり、少なくとも二度の転写を経ている。再転写の奥書はないが、その時期について望月氏は、「今の善導寺所蔵の本は、永仁二年(甲午)九月十三日沙門寛恵(満七十)の写本に就き、展転複写したもので、慶長元和頃の摸写である」と述べ江戸初期とみている(望月、一九七七、七七―頁)。判断の根拠は示さないが氏の

観察眼によるのだろうか。

これより古いとみたのは梅津次郎氏であり、鎌倉後期の②国華本を紹介するにあたり善導寺本も詳しく考察し、「善導寺本の」筆蹟は相当に古く二二の専門家の意見を徴したところは凡そ南北朝頃と推定された。絵の側より見る時はこの一種泥絵風の下手な作風を其辺りまで遡らしめて比較し得る作品を未だ見出し得ないが、かゝる作風はたとへば応永廿六年の杉谷神社藏天神縁起絵、その他に迄遡るのであつて、斯本の書写は従来考えられたよりも意外に古いものであることだけは今回の実見によつて明らかになつた」と述べた(梅津、一九五〇、四二六頁)。さらに後には「善導寺本は貴重な存在であるが、室町時代の粗末な伝写本である……」と述べている(梅津、一九七〇、一一二頁)。このような美術史家の鑑定を経て善導寺本は室町時代の再転写とされる。

絵画は一見すると稚拙で硬直感があり、素人目にも後世の感じがする。「一種泥絵風の下手な作風」との評も頷かれる。しかし近年それとは別の角度から、「素朴な奈良絵本風の筆致を示すことから永仁の写本ではなく、室町時代の再転写本と考えられる」(特別展図録、二〇一八、一九八頁)との指摘は短いながらも重要。絵師の技量の問題ではなく、奈良絵本的な画風として捉える視点を提示した点で注目される。確かに善導寺本の画風は奈良絵本の素朴さに通じるものがあり、再転写したのは奈良絵本を手掛けた絵師ではないかと思わせる。奈良絵本は室町末から江戸初期に流行したとされるが、再転写の時期を含め今後画風の検討がなされることに期待したい。また漢文箇所のポイントに注意すると、室町末〜江戸初期頃の形状を示しており、時代を絞る要素になろう。

『伝法絵』は嘉禎三年(一二三三)に作られたが、内容で問題となつたのは、嘉禎四年の聖光房弁長の入滅に触れることや、湛空は嘉禎三年に六十二歳のはずが奥書に六十九歳と記すことである。この二点は別人説をとつた望月氏の紹介当初から指摘され、史料価値を疑わせる要因となつてきた。

法然伝に対する批判的視点を切り開いた中沢見明氏は、弁長に関する記事は彼の没後から永仁二年（一二九四）寛恵伝写までの間に弁長門下の誰かが竄入したものとみて、弁長記事を除けば叡空を「黒谷上人」と呼ぶ古い用例があり、建長六年（一二五四）の『古今著聞集』に影響を与えているから嘉禎三年成立は確かとした（中沢、一九五一）。田村田澄氏も嘉禎三年を認めた上で弁長記事は後人の竄入とみている（田村、一九七二、二五頁）。

さらに久木幸男氏は先の二点以外にも問題視すべき内容のあることを指摘する。慈円を嘉禎三年の諡号慈鎮と呼ぶこと、藤原兼隆（兼高）の官位、架空人物の京極民部卿兼俊、慈円・公胤の法然中陰参加、後鳥羽院を隠岐院ではなく仁治三年（一二四二）の諡号後鳥羽で呼ぶことなどは内容的におかしいという。とすれば奥書も信用できるものではなく、『伝法絵』は何者かが就空の名を借りて仁治三年以降に書いたとみた（久木、一九六〇）。

このように内容上の疑義から奥書まで疑われたが、『伝法絵略記抄』と称する①金沢文庫本の発見で、嘉禎三年の正しさは証明された。これは『伝法絵』の一部を抄出したもので、『末法灯明記』『大唐西域記』の抄出と合綴されている。鎌倉期写本であるのは間違いないが、『末法灯明記』のところに延応元年（一二三九）書写を意味する文があり、嘉禎三年のわずか二年後のことである（納富、一九九五）。

成立間もない頃の金沢文庫本の出現で祖本の成立は嘉禎三年と認めてよく、成立年に関する疑問は払拭された。先の高野山文書から湛空一門に観空のいたことは確かで、このような無名の人物を載せる善導寺本奥書には信憑性がある。弁長入滅の記事は画中詞であり後から書き入れやすく、この文は弘安七年（一二八四）の『聖光上人伝』に「伝法絵云…」として引用される。弁長没を知った湛空による加筆と解したほうが無理がなく、六十九歳の年齢は伝写の過程における誤写とみるほかない。後鳥羽の表記は確かに悩ましいが、これもおそらく湛空による書き換えではなからうか。久木氏が奥書まで疑ったのは行き過ぎだが、一方で登場人物のチェックはどの伝記においても

必要なことを知らしめる。

②国華本は鎌倉後期の書写とされ絵も淡彩のすぐれたものだが、残るのは巻下だけで、しかも太平洋戦争後の混乱期に断簡に切断され、現在では岡山県立博物館ほか諸家に分蔵される。梅津次郎氏が断簡を集めて『国華』誌上に掲載したことから国華本または残欠本と呼ばれる。国華本と時代の下る善導寺本は原型をどれほど保持するのだろうか。梅津氏によれば、国華本には善導寺本にない詞書や絵図があり、国華本がより祖本に近い形態を備える。画中詞のある善導寺本の特異な形態は国華本にも認められ、『伝法絵』祖本で既に備わっていたことを指摘する（梅津、一九五〇）。

中井真孝氏も両本を比較検討し、両本の共通する詞書に内容上の大差はなく、善導寺本は欠落する絵図に対応する詞書は省略せず、国華本のみにある詞書は画中詞が多い。善導寺本にそれらがなくても伝記史料としての性格を損なうわけではない。善導寺本は巻一・二と巻三・四とでは画中詞や人名銘記の有無に違いがあり、これは巻一・二が『伝法絵』のオリジナルに近いものを、巻三・四が永仁二年寛恵書写本を写した、つまり時期の異なる写本を転写したからだという（中井、二〇一三）。ただ、元となった写本の時期が異なりながら、共に祖本の奥書があったのかという疑問もおこる。

梅津・中井氏による綿密な比較により、国華本と善導寺本の性格や長短が指摘された。祖本に近い姿を残すのはこの両本であり、祖型探究という点では今後も両本が中心となろう。また中野正明氏は『伝法絵』諸本それぞれの成立を考察する（中野、一九九四）。国華本の原型をもとに善導寺本の原型が成り立ったとみるが、両本に書写関係があるならば善導寺本の奥書はどこから来たのか。

③高田本は『法然上人伝法絵』と題し、絵を省き詞書だけを写したもので、永仁四年（一二九六）、顕智（親鸞・

真仏弟子)の書写になる。『伝法絵』を元とするも内容はかなり増広されている。例えば「七箇条起請文」の引用をみると、善導寺本では条文は簡略で署名も省略するのに対し、高田本は条文全体を引き、署名も全員ではないが「源空」以下二十一名を連ねる。このほかにも多くの異同があり『伝法絵』と別の伝記とみてよいほどである。弘願本『法然聖人絵』の詞書に影響を与えた。昭和二年(一九二七)松山忍明氏によつて紹介され、現在では影印をみる事が出来る(影印高田古典、二〇〇一)。

初の法然絵伝は当時の人々にどのように読まれたのか。善導寺本卷二の奥書に「此絵披見之人、奉_レ礼三尊之像、其詞説明之輩、讀_二誦大經之文_一」という一文がある。宮崎円遵氏はこの奥書、および説明文(画中詞)の多さや絵の特徴等から、『伝法絵』は絵解きのための絵巻物として作られたという(宮崎、一九八九)。『伝法絵』の性格や役割を考える上で貴重な指摘である。ただ、奥書からそう解釈できないことはないが、実際に絵解きされたかは不明。『伝法絵』の発展的展開として注目されるのは掛幅本の制作である。明らかに絵解用に作られた掛幅本の法然伝には、『伝法絵』やその系統の『法然聖人絵』を主な素材とするものが多いことが詳細な調査から解明されている(米倉、一九八一。小山、二〇〇〇)。『伝法絵』は掛幅本に姿を変えて法然浄土教の教線拡張に寄与したといえる。

今堀太逸氏は、『伝法絵』は絵解きのために作られたとみて内容全体をトレースし、法然の念仏を山門の念仏と捉える『伝法絵』は関東布教に活用され効果を上げたと主張(今堀、一九九九)。法然の生涯を叙述する『伝法絵』が山門の念仏を説くとみるなら、どのような意味で山門的なのか、より具体的な論証が欲しいところ。平間理俊氏は「秘密灌頂」「かけろ」(鶏の鳴き声)の言葉や、独自和歌を収録することに着目し、作者の来歴や思想について関連史料を集めて考察し、作者は二尊院湛空の可能性が高いと指摘(平間、二〇一九)。また鸚鵡の念仏往生や蝙蝠

の転生譚は、『三宝感応要略録』『今昔物語』等との繋がりが強いと指摘する（平間、二〇二二）。法然伝の背後に広がる説話世界の探求に期待したい。

『伝法絵』は初の本格的伝記である。法然の誕生から入滅および嘉禄の法難までストーリーは年代順に進み、生涯の事績はかなり出揃う。法然の生涯の流れは『伝法絵』によって構想されたといえる。後継伝記への影響の大きさから伝記の源流に位置づけられる。今後の研究と新たな写本の発見に期待したい。

三 醍醐本『法然上人伝記』

伝記と称するものの中身の大半は語録であり、源智が記録した法然の言葉を源智門弟が編集したとされる。「上人入滅以後及三十年」の記述から、法然没後三十年の仁治二年（一二四二）に編集されたとみられる。伝記と語録集の双方の性格を備えており、『西方指南抄』『黒谷上人語燈録』と同列にも扱われる。

真言宗醍醐寺の三宝院から発見され、大正七年（一九一八）望月信亨氏はそれを紹介し、「其の伝来の頗る古きを知るべく、即ち上人遺教の第一結集と称すべきものなるが如し」と述べ、その古さと初の語録集であることを評価した（望月、一九七七）。大正十二年（一九二三）刊行の『仏教古典叢書』に活字本として収録され、これを元に様々な特徴や問題点が論じられてきた。醍醐本の構成と成立過程の解明をはじめとし、「二期物語」と後継伝記の関係、「三心料簡および御法語」の悪人正機説等の希少な法語の真偽、「別伝記」の法然登山後父死亡などの問題である。悪人正機説は評価が定めにくく、登山後死亡についても信憑性に疑問はあるが、法然研究の一級史料である

ことは間違いなく、多くの研究者の興味を引いてきた。

昭和時代の研究の到達点を示すのは、藤堂恭俊博士古稀記念『浄土宗典籍研究』である（藤堂記念、一九八八）。これは醍醐本や『逆修説法』、法然二十五霊場の共同研究を企図したもので、多数の関係論文と待望された醍醐本の影印を収め、この段階の浄土教学・浄土宗史の専門家を総動員した成果を示す。研究者は通常、その成果を個別にパラパラと発表するが、特に重要史料についてはこのように集中的に取り組むことで前進が見込める。昭和時代の研究史については、これに収める野村恒道氏の回顧を参照されたい（野村、一九八八）。

平成時代に入り研究動向に変革をもたらす発見があった。平成七年（一九九五）、水口町立水口図書館（現在は甲賀市水口図書館）から大徳寺本『拾遺漢語燈録』が発見された。水口町の浄土宗大徳寺旧蔵であったことから大徳寺本と呼ばれる（梶村・曾田、一九九六）。醍醐本と『拾遺漢語燈録』は内容が似通っており、それまでも両者の関連性は指摘されていたが、江戸時代に文章が著しく改変された義山版『拾遺漢語燈録』に基づくほかなかった。大徳寺本は元の古い文体をとどめたもので、これにより醍醐本との比較が正確に行えるようになった。

以上のような状況を捉えて伊藤真昭氏は研究史を三期に分ける（伊藤真昭、二〇〇九）。

第一期 活字本の時期

『仏教古典叢書』の活字本で研究した時期、昭和時代

第二期 影印本の時期

醍醐本の影印が見られる時期、平成時代

第三期 大徳寺本『拾遺漢語燈録』発見以降

大徳寺本が見られる時期、平成・令和時代

依拠史料を軸とした三期分けであり、研究上の節目をよく押さえた区分である。以下では第三期の研究を中心に取りあげる。

大徳寺本の発見で醍醐本の成立を全体的に見直す機運が到来した。注目すべき問題提起は、大徳寺本を発見した曾田俊弘氏によってなされた。さらに曾田説を継承した伊藤真昭氏は、あたら限りの関連史料を集めて醍醐本の成立過程と伝来を考察する。両氏の論点は多岐にわたるが要点をまとめると、『拾遺漢語燈録』は醍醐本を元に作られたという従来の見方に疑問を呈し、醍醐本と『拾遺漢語燈録』の原資料となった源智の聞書の存在を想定する。

曾田氏はそれを「源智本」と呼び、『拾遺漢語燈録』の「浄土宗見聞第一付臨終記」がそれに該当するという。伊藤氏は「見聞」「見聞書」と呼び、醍醐本の「一期物語」「禅勝房との問答」「御臨終日記」がそれに該当するという。これが源智の手許にあったオリジナルのものである。ここに「三心料簡および御法語」は含まれず、醍醐本編集時に後から付加された。そして醍醐本も『拾遺漢語燈録』も源智本（見聞）を素材として別々に作られた。つまり『拾遺漢語燈録』は醍醐本を原資料としたのではなく、両者は異なる系統で編集された。曾田氏は醍醐本より『拾遺漢語燈録』に源智本の原形が保持されるとし、伊藤氏によれば醍醐本は西山派で編集され醍醐寺に伝来したという（曾田、二〇〇一）（伊藤真昭、二〇〇九）。このように両氏の見解は、醍醐本と『拾遺漢語燈録』は源智本（聞書）を原資料とするが、編集過程においては別系統とした点に大きな特徴がある。

これに対し善裕昭は両氏の説を検討し、「一期物語」と「三心料簡および御法語」に源智の私積があるから、「一期物語」「禅勝房との問答」「三心料簡および御法語」は最初から一連の形で彼の手元にあった。これを元にして源智門弟あるいは『平戸記』にみえる仕仏上人が醍醐本を編集した可能性がある。この醍醐本を原資料として『拾遺漢語燈録』は作られ、その際「三心料簡および御法語」「別伝記」は省かれたとし、醍醐本と『拾遺漢語燈録』の

編集関係を切り離すことを批判する（善、二〇一四）。

さらに曾田氏は善説に反論し、『拾遺漢語燈録』を編集した了恵は醍醐本を見たのかどうかを問題とする。善は了恵が「三昧発得記」を含む醍醐本を見た可能性はあると考えるが、曾田氏によれば了恵は明遍が「三昧発得記」を見て涙を流した話は醍醐本以外から知ったのであり、了恵は醍醐本を見なかったと主張する。明遍が「三昧発得記」を見たのは貞応三年（一二二四）一月二十五日に浄意尼が二尊院で行った法然十三回忌であり、このとき源智は封印していた「三昧発得記」を開題供養に供した。この話は浄意尼↓良忠↓了恵へ伝わったという（曾田、二〇一八）。明遍は同年六月十六日に没するが、はたしてその五カ月前に八十三歳の高齢で高野山から二尊院へ赴いたのか。具体的な検討は別の機会に譲るが、推測が重なるのが気になる。

また森新之介氏は異なる視角から成立過程を検討する。冒頭の「法然上人伝記 附一期物語 見聞出勢観房」は従来、醍醐本全体の内題とされたが、これは第一篇（一期物語全二十条）だけの篇題であり、全二十条は前三条と後十七条に分けられる。本来、伝記調の長い第一条だけが「法然上人伝記」であり、第二・三条が「一期物語」である。これが「法然上人伝記 附一期物語」にあたる。これに源智の「見聞」十七条が増補され全二十条となり、「法然上人伝記 附一期物語 見聞出勢観房」となった。「法然上人伝記」であった第一条の書き出しは後に「或時物語云」の形に改変され、二十条すべてが法然法語の形となった。さらに第一条には、父が討たれて十三歳で登山したとおそらく書かれていたが、登山後に父が没したと説く「別伝記」と矛盾しないよう改変され、「幼少登山」という漠然とした記述になった。醍醐本の編者は隆寛に近い者という（森、二〇一九）。

大胆な成立論であり、確かにこう解釈すれば「法然上人伝記」の後に「二期物語」が位置する。しかし、本来第一条が「法然上人伝記」であり、第二・三条が「一期物語」、第四条以下が源智「見聞」とみる区分の有効性はど

れほどか。編纂物に改変を伴うのはあり得るが、改変の読み取りが過剰ではなからうか。

さらに森氏は醍醐本の成立に山門訴訟を関係づける。前稿を一部訂正した上、「二期物語」前三条と「別伝記」はもともと、山門訴訟に陳弁するため法然遺弟らが朝廷に提出した陳状の添付書類（具書）であったと推定する。「別伝記」は貞応三年（一二二四）の訴訟に対応するため空阿が作り、「二期物語」前三条は嘉祿三年（一二二七）の訴訟に対応するため隆寛が作ったものという（森、二〇二一）。

伝記の形成に外的要因を盛り込んだのは注目されるが、朝廷が山門奏状を法然遺弟に回付して陳状を提出させたことが立論の前提となっており、その事実をもっと論証する必要がある。また、例えば「一期物語」第一条には法然独自の『往生要集』解釈が教理的に立ち入って示されるが、はたして朝廷に提出する文書にふさわしいのか。今しばらく今後の推移を注視したい。

「附一期物語」の表記には長らく悩まされてきたが、曾田氏は「一期物語」は「御臨終日記」を指すという新たな解釈を提示する。さらに伊藤氏は「御臨終日記」「三昧発得記」を指すとし、森氏は以上のような見解を示す。私は「一期物語」は従来通りの箇所を指すとみる。しかし解釈がこうも多様になると、醍醐寺蔵本にしかない「附一期物語」という表記にどれほど真剣に向き合うべきなのか、「附」の一字に振り回されているのではないか、とさえ思えてくる。解決の糸口は新たな写本の出現に期待するほかないか。

醍醐本のなかで他に所伝がないのは「三心料簡および御法語」と「別伝記」である。とくに前者は系統不明とされ真偽が問題となった。しかし一条一条を個別的にみると、類似の言葉を『選択集』や語録等に見出すことができる（奈良、一九七六）。一括して偽撰視するのは適切でない。

注意すべきは法然語録以外からも醍醐本に対応する法語が見出されたことである。永井隆正氏によれば、高田派

顕智が鎌倉後期に写した『見聞』に、醍醐本の「一期物語」「禅勝房との問答」「三心料簡および御法語」「三昧発得記」のそれぞれ一部が抄出されている。とくに「三心料簡および御法語」からの抄出が多い。元となったのは醍醐本もしくはそれに近い形のものである。現醍醐本は近世初頭の写本だが、『見聞』によって鎌倉時代から確かに醍醐本が存在したことが明瞭となった（永井、一九九三）。永井氏が扱ったのは『高田学報』の影印だが、現在では（影印高田古典、二〇〇一）で全体の影印を見ることができるといえる。

これを皮切りに、真宗系の談義本『本願成就聞書』や江戸時代の高田派恵雲の著作からも「三心料簡および御法語」の一部引用が見出された（真柄、一九九四）（曾田、一九九八）。また板敷真純氏によれば、永井氏検討の『見聞』の醍醐本箇所は、後の筆跡研究で顕智弟子の専空筆と判明したことを踏まえ、顕智筆『聞書』に写された醍醐本の方がより早い書写であるとし、醍醐本と『聞書』を比較検討する。現醍醐本の誤字を『聞書』によって正せることを指摘する（板敷、二〇一九）。

このように真宗系の史料から醍醐本に対応する法語が見出されてきた。「三心料簡および御法語」には一定の広まりがあり、他に見えないという理由で系統不明とするのははや適切でない。孤立したイメージは払拭されつつあり、今後の更なる探索に期待したい。

大徳寺本が発見されたとはいえ醍醐本の関連史料は乏しく、推測や想定に頼る部分が出ざるを得ない。成立過程を決定的に明らかにするのは困難であるが、暫定的ながらも考察を続け、間違いがわかれば修正・変更を加え、真実に近づいてゆく不断のプロセスを大切にしなければならない。

四 『源空聖人私日記』

最後に『源空聖人私日記』（以下、『私日記』）に少し触れておく。『私日記』は法然の語録集である『西方指南抄』に含まれる一書として伝わる。『西方指南抄』は康元元年（二二五六）から翌二年にかけて親鸞によって書写された。『私日記』は直弟の真筆で残る法然伝であり、伝記写本としても古い。『西方指南抄』に収録されるので『私日記』は康元元年までに作られており、これが成立の下限となる。法然没後四十四年までに出来ていたわけで早い時期に属する。さらに成立の上限はどこまで溯りうるのか。

批判的史眼で法然伝を検討した中沢見明氏は、『私日記』を最古の法然伝として評価し、作られたのは安貞二年（二二二八）の法蓮房信空の滅後とした（中沢、一九五二）。法然伝の体系的な研究を築いた田村円澄氏は、中沢説を継承して『私日記』を最古の法然伝とし、成立の上限を建保四年（二二二六）まで引き上げた（田村、一九七二）。ならば法然没から四年しか経っておらず大変古い。こうして『私日記』は現存するすべての伝記の原型に位置すると考えられた。中沢氏も田村氏も法然伝研究の草分けであるだけに、及ぼした影響は大きかった。

しかしその後の研究では、醍醐本「一期物語」や『伝法絵』のほうが先行し、『私日記』はそれらに基づいたとされる。三田全信氏は『私日記』と「一期物語」に類似の記事が多いことをあげ、両者の前後関係は、「一期物語」が先で、『私日記』が「二期物語」から取材引用したと指摘する（三田、一九八〇）。さらに中井真孝氏は、従来説の問題点を逐一検討した上、『私日記』は「一期物語」や『伝法絵』に基づいた二次的法然伝であることを類似箇所をあげて綿密に検討する。そして『私日記』は、『伝法絵』が作られた嘉禎三年（二二三七）あるいは醍醐本が

編集された仁治二年（一二四二）から、『西方指南抄』が書写された康元元年（一二五六）までの間に成立したとする（中井、一九九四）。

かつて『私日記』は最古の法然伝とされたが、「一期物語」や『伝法絵』より遅れるとされ、その内容や位置づけは考え直さねばならない。しかし初見記事や独自記事もあり、早い部類に属するのは間違いなく、重要であることに変わりはない。

参考文献一覧

『知恩講私記』

善 裕昭「法然上人伝の誕生①〜④」（『宗報』、浄土宗、二〇二二・一月〜二〇二五・二月連載）

榎田良洪「新発見の法然伝記―『知恩講私記』―」（『日本歴史』二〇〇号、一九六五）

同右 「新発見の隆寛著書」（『日本歴史』二〇二号、一九六五）

同右 「史料紹介 知恩講私記」（『仏教史研究』一〇号、一九七六）

同右 「史料紹介 別時念仏講私記」（『日本仏教史学』一三号、一九七八）

赤松俊秀「新出の『知恩講私記』について」（『続鎌倉仏教の研究』、平楽寺書店、一九六六、初出一九六五）

伊藤唯眞「『知恩講私記』と古法然伝」（『伊藤唯眞著作集Ⅳ 浄土宗史の研究』、法蔵館、一九九六、初出一九六五）

阿川文正「知恩講私記と法然上人伝に関する諸問題」（『大正大学研究紀要』五一輯、一九六六）

三田全信「成立史的法然上人諸伝の研究」（光念寺出版部、一九六六、再版は平楽寺書店、一九七六）

宇高良哲「新出の隆寛作天台諸大師講式について」（『大正大学研究紀要』七五号、一九九〇）

小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」（『同朋大学論叢』六二号、一九九〇）

靈山勝海『西方指南抄論』（永田文昌堂、一九九三）

伊藤茂樹「知恩講について」(『浄土宗学研究』四〇号、二〇一四)

本庄良文「隆寛撰『知恩講私記』現代語訳」(『佛教学法然仏教学研究センター紀要』創刊号、二〇一五)

坪井 剛「知恩講私記の再検討―専修念仏教団における祖師信仰儀礼の形成」(『佛教学法然仏教学研究センター紀要』創刊号、二〇一五号、二〇一六)

『法然上人伝法絵』

『本朝祖師伝記絵詞』(善導寺、一九二二)

望月信亨「本朝祖師伝記絵詞に就いて」(『浄土教之研究』、日本図書センター、一九七七、初出一九一一)

中井真孝編『善導寺蔵』(本朝祖師伝記絵詞)本文と研究(『佛教学法然仏教学研究センター紀要』創刊号、二〇一五)

井川定慶「法然上人絵伝の研究」(法然上人伝全集刊行会、一九六一)

中井真孝「『伝法絵』(本朝祖師伝記絵詞)の作者と成立」(『法然上人絵伝の研究』、思文閣出版、二〇一三、初出二〇〇七)

伊藤信二「法然上人伝法絵」(『デアルテ』一〇号、一九九四)

梅津次郎「新出の法然上人伝法絵について」(『国華』七〇五号、一九五〇)

同右『絵巻物残欠の譜』(角川書店、一九七〇)

特別展図録『浄土九州―九州の浄土教美術』(福岡市博物館、二〇一八、執筆末吉武史)

中沢見明「法然諸伝成立考」(『真宗源流史論』、法蔵館、一九五一、再刊一九八三、初出一九三三)

田村円澄「新訂版『法然上人伝の研究』、法蔵館、一九七二、元版一九五六)

久木幸男「軌空絵詞の嘉禎三年成立を疑う」(『印度学仏教学研究』八卷一号、一九六〇)

納富常天「伝法絵略記抄断簡」(『金沢文庫資料の研究 稀覯資料篇』、法蔵館、一九九五、初出一九九二)

中井真孝「『伝法絵』の善導寺本と国華本」(『法然上人絵伝の研究』、思文閣出版、二〇一三、初出二〇〇六)。

中野正明 『伝法絵』 諸本の成立過程」(『仏教文化研究』三九号、一九九四)

『影印高田古典第三卷 顕智上人集(中)』(真宗高田派宗務院、二〇〇一)

宮崎円遵 『法然上人伝の絵解と談義本』(同著作集第七卷『仏教文化史の研究』、永田文昌堂、一九八九、初出一九七

四)

米倉迪夫 『西導寺藏掛幅本法然上人絵伝について』(『美術研究』三一六号、一九八二)

小山正文 『法然絵伝と真宗』(『親鸞と真宗絵伝』、法蔵館、二〇〇〇、初出一九八八)

今堀太逸 『法然上人 伝法絵流通』と関東』(『本地垂迹信仰と念仏』、法蔵館、一九九九、初出一九九五)

平間理俊 『法然上人伝法絵』の和歌と作者―善導寺本の表現を手がかりに―』(『仏教文化研究』六三号、二〇一九)

同右 『法然上人 伝法絵』善導寺本にみられる説話の生成と展開』(『仏教文化研究』六五号、二〇二二)

醍醐本 『法然上人伝記』

望月信亨 『醍醐本法然上人伝記に就いて』(『浄土教之研究』、日本図書センター、一九七七、初出一九二八)

藤堂恭俊博士古稀記念『浄土宗典籍研究』研究篇・資料篇二卷(同朋舎出版、一九八八)

野村恒道 『醍醐本研究に関する回顧と展望』(右書収録、一九八八)

梶村昇・曾田俊弘 『新出『大徳寺本拾遺漢語燈録』について』(『浄土宗学研究』二二二号、一九九六)

伊藤真昭 『醍醐本『法然上人伝記』の成立と伝来について』(『仏教文化研究』五三三号、二〇〇九)

曾田俊弘 『拾遺漢語燈録』と醍醐本『法然上人伝記』の関連性』(『仏教文化研究』四五号、二〇〇二)

善 裕昭 『醍醐本『法然上人伝記』の成立をめぐる』(『仏教文化研究』五八号、二〇一四)

曾田俊弘 『拾遺漢語燈録』と醍醐本『法然上人伝記』の関連性再考』(『浄土宗学研究』四四号、二〇一八)

森新之介 『醍醐本『法然上人伝記』の成立過程―篇題や識語などに着目して―』(『浄土学』五六輯、二〇一九)

同右 『最初期源空諸伝の形成過程―山門からの訴訟などに着目して―』(『浄土学』五八輯、二〇二二)

奈良博順 「三心料簡および法語ノート」(『倫理思想研究』 一号、一九七六)

永井隆正 「顕智筆『見聞』に見られる醍醐本『法然上人伝記』」(『法然上人研究』 二号、一九九三)

『影印高田古典第三卷 顕智上人集(中)』(真宗高田派宗務院、二〇〇一)

真柄和人 「『本願成就聞書』について」(『東山学園研究紀要』 三九集、一九九四)

曾田俊弘 「恵雲(真宗高田派)の著書にみられる『法然上人伝記』「三心料簡事以下二十七法語」(『仏教論叢』 四二号、一九九八)

板敷真純 「高田門徒の高田顕智『聞書』の資料的価値―醍醐本『法然上人伝記』をめぐって」(『東洋学研究』 五六号、二〇一九)

『源空聖人私日記』

中沢見明 「法然諸伝成立考」(『真宗源流史論』、法蔵館、一九五一、再刊一九八三、初出一九三三)

田村円澄 『新訂版 法然上人伝の研究』、法蔵館、一九七二、元版一九五六)

三田全信 「醍醐本と私日記」(『改訂増補 浄土宗史の諸研究』、山喜房仏書林、一九八〇)

中井真孝 「『源空聖人私日記』の成立について」(『法然伝と浄土宗史の研究』、思文閣出版、一九九四、初出一九八四)

キーワード 法然伝、知恩講私記、法然上人伝法絵、醍醐本法然上人伝記